様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１５２０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2015
課題番号：２４７２００９７

研究課題名（和文）奉納和歌を中心とした百首歌の研究

研究課題名（英文）Study on "Hyakusyu-Uta" Focused on "Hono-Waka"

研究代表者
野本　瑠美（NOMOTO, Rumi）

島根大学・法文学部・准教授

研究者番号：４０６０９１８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、奉納百首を中心に「百首歌」と呼ばれる詠作形態が持つ表現上の特徴の解明を目的とするものである。平安末期の『寿永百首』の分析から、雑部の構造（贈答歌の選択や題詠・実情詠の配置など）と奉納百首としての編纂意図が密接に関わっていることを明らかにした。また、従来曖昧なままであった「奉納」の定義や、さほど重視されてこなかった平安期～鎌倉初期の「長歌」形式の詠歌についても、新たな見解を示すことができ、今後の和歌文学研究の一助となるような成果をあげることができたと考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify the characteristics of the representation of "Hyakusyu-Uta". I analyzed "Juei-Hyakusyu" in the End of Heian Period, I found a close relationship between the purpose of the compilation and the constitution of "Zo-bu". Furthermore, I think I was able to show new knowledge about a definition of "Hono-waka" and the representation of "Cho-ka" from the Heian to early Kamakura period.

研究分野：和歌文学

キーワード：日本文学　和歌文学　百首和歌　百首歌　奉納和歌　応制和歌

１．研究開始当初の背景

「百首歌」とは、百を単位とした和歌の詠作形態のことで、10 世紀半ばに成立した曾禰好忠の百首を嚆矢とする。「初期百首」と呼ばれる、『好忠百首』から 11 世紀前半の『相模百首』は、ゆるやかな部立のもとに構成された、私的な試みによる作品であったが、12 世紀初頭の『堀河百首』において、公の場で多人数が同一条件の下で百首を各々詠進する形式が登場し、以後、公的な場で和歌を詠進する際、最も重要な形態として定着していった。中世以降、天皇や上皇の勅命に従って詠む応制百首や、寺社への奉納、作歌の習練など、膨大な数の百首歌が詠まれており、題詠の深化や題の本意の形成といった点においても、百首歌は重要な役割を果たしたと認められている。近年では『歌合・定数歌全釈叢書』（風間書房）が刊行され、百首歌への関心は一層高まっている。

『堀河百首』から半世紀ほどを経た平安末期には、百首歌の詠作数が急激に増加し、百首歌の画期と位置づけられている。この時期については、松野陽一氏（「平安末期の百首歌」『鳥帰―千載集時代和歌の研究―』風間書房、1995 年）により基礎的な資料の整理がなされ、「詠作形態自体の持つ特質の究明」と「百首歌の作品に即した検討」が今後の課題とされた。その後、作品ごとに精緻な注釈や分析が積み重ねられ、「百首歌の作品に即した検討」については飛躍的な進展が見られたが、「詠作形態自体の持つ特質の究明」に関わる総合的な研究への取り組みは少なく、いまだ統一的な見解が成立していないのが現状である。

２．研究の目的

このような研究状況を踏まえ、研究代表者はこれまで、百首歌を総体的に捉え、その特質と影響を明らかにすることを目的として考察を進めてきた。本研究では、百首歌のうち、中世和歌の中で重要な位置を占め、膨大が詠作が残されている寺社に奉納された百首（奉納百首）を中心に、詠歌集成や表現分析を通して、百首歌という形態が作品に及ぼす影響を明らかにすることを目指した。

３．研究の方法

本研究では、奉納和歌を中心に「百首歌」という詠作形態の持つ特徴を明らかにするため、以下の４点に基づき、詠歌集成、表現分析、時代背景の考察を行った。

（１）奉納百首の先駆けとなった『寿永百首』を中心に、表現・構成の分析や社頭歌合等の言説との比較を通して、平安末期における「奉納」という行為が作品に及ぼす影響を明らかにする。

（２）平安～鎌倉期までの奉納和歌を集成・分類することにより、奉納和歌史の展開を明らかにする。

（３）「天神仮託歌集」のデータベース構築のため、諸本調査及び本文研究を行う。

（４）奉納百首との比較検討のため、応制百首の特徴を明らかにする。具体的には、『久安百首』・『正治両度百首』などに見られる述懐性の表出や君臣和楽の演出等の表現に着目し、帝への奉献と神仏への奉納との共通点・相違点を明らかにする。

４．研究成果

（１）『寿永百首』研究

奉納百首の先駆けとなった『寿永百首』の中の『鴨長明集』を対象に表現分析を行い、『鴨長明集』に一組だけ収められた贈答歌と雑部の構成から、賀茂社奉納の目的と百首家集編纂の意図を明らかにした。従来、『鴨長明集』は長明の伝記資料として用いられることが多く、贈答歌も青年・長明の身勝手な嘆きと、それを窘め慰める同族の年長者・鴨輔光のやりとりとして捉えられてきたが、この贈答には長明が抱く願いが同族によって肯定されたことを示す役割と賀茂の神への祈願の言葉としての機能を担わされていたことを指摘した。この成果は「『鴨長明集』の贈答歌―寿永百首との比較から―」と題して『島大国文』（2013 年）で発表し、後に学位論文『中世百首和歌の研究』第二編第一章第三節（2014 年）に加筆しまとめた。今回は『鴨長明集』を中心に論じたが、他の『寿永百首』にも「奉納百首」としての工夫が見られることを確認している。今回用いた手法（贈答歌や雑部の構造、題詠と実情詠の配置からの分析）は、他の『寿永百首』研究においても大いに役立つものであり、今後さらなる研究の進展が見込まれる。

（２）奉納和歌の詠歌集成と分類

平安～鎌倉期までの奉納和歌を集成・分類のため、これまで定義が曖昧であった「奉納」という行為を和歌資料から再検討した。具体的には、歌集等の詞書に見られる表現を手がかりに、どのような行為が神への奉納と見なされていたか、いくつかのパターンによって分類した。また、現在「法楽」「奉納」といった用語が混在しているが、「奉納」を用いる方が実態にふさわしいことを指摘した。この成果は山陰〈知〉の集積ネットワーク第 22 回研究会で「始発期の奉納和歌」と題して発表（2013 年）し、その後、博士学位論文第二編第一章第一節「奉納和歌とは何か」（2014 年）にまとめた。

（３）「天神仮託歌集」データベース「天神仮託歌集」構築のための調査と本文研究

「天神仮託歌集」の諸本調査及び本文研究のため、実践女子大学の山岸文庫に多数所蔵されている天神仮託歌集の書誌調査と資料の複写を行った。その成果として、山岸文庫

所蔵の『天神百詠』の翻刻と諸本比較等の基礎的研究を行い、その成果を学位論文第二編第二章第二節「実践女子大学山岸文庫蔵『天神百詠』考」（2014 年）にまとめた。
　さらに「天神仮託歌集」の１４種（家集系８系統、百首系６系統）の主要伝本の翻刻をテキストデータ化し、データベース作成のための基礎データを作成した。

（４）応制百首研究
　奉納百首との比較検討のため、応制百首『久安百首』の長歌を中心に表現分析を行い、帝への奉献の際に見られる述懐性の表出と、帝への奉献と神仏への奉納との共通点・相違点について考察した。その成果を、2013 年和歌文学会 5 月例会で「『久安百首』における訴嘆の方法」と題して発表し、後に学位論文第一編第一章第二節「『久安百首』の述懐歌」（2014 年）にまとめた。
　また上記調査の過程で、長歌に関するさらなる調査と分析が必要と判断し、『久安百首』の長歌を中心に表現分析を行い、帝への奉献の際に見られる述懐性の表出について考察し、先行する長歌作品との関連や詩序における述懐の表出との関連を明らかにした。その成果を、論文（「『久安百首』の「短歌」―長歌形式による述懐の方法―」（『島大国文』35、2015 年）として公表した。また、平安期～鎌倉初期において長歌という詠歌形態が果たした役割を考察し、「長歌」という形態が詠作者の不遇感の表出や奉献の意思表明に及ぼす影響を明らかにした。その成果を「崇徳院と長歌」と題して東京大学中世文学研究会第 328 回例会（2014 年）で発表した。

（５）そのほか
　先述したが、百首歌研究のこれまでの総括として博士学位論文「中世百首和歌の研究」を東京大学大学院人文社会系研究科に提出し、博士（文学）の学位を取得した（2014 年 9 月）。今後はさらなる調査を加えた上で、研究書としての出版を計画している。
　このほかに、関連する研究成果として、平安期私家集の本文の流布と受容について『夫木和歌抄』所収の私家集歌について口頭発表を行った（「『夫木和歌抄』と平安私家集」2014 年）ほか、島根県出雲市の旧家に伝存する和歌資料について調査を行い、資料紹介を行った（「手錢家の古筆資料」2015 年）。

（６）研究成果の意義と今後の展望
　本研究により、百首歌研究において雑部に着目した分析手法が有効であることが証明され、『久安百首』『寿永百首』以外の作品にも応用が可能と判断できる。
　奉納百首研究としては、従来曖昧であった和歌の「奉納」の定義について一定の方向性を示すことができた。また、これまで余り省みられることなく和歌データベースにも所収されることのなかった「天神仮託歌集」の本文データベース化に取り組み、主要伝本のテキストデータを作成した。これらの成果を踏まえ、平成 28 年度からは新たに若手研究Ｂ「奉納和歌の発生と展開に関する研究」（課題番号　16K16763）を開始した。今後はさらに寺社奉納関連の和歌の用例を集成し、平安期～鎌倉初期における奉納の実態を追究していく予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　４件）
①野本瑠美、「手錢家所蔵の古筆資料」、『山陰研究』、査読有り、8 号、2015、25～35 頁
http://ir.lib.shimane-u.ac.jp/metadata/34897

②野本瑠美、「『久安百首』の「短歌」―長歌形式による述懐の方法」、『島大国文』、査読無し、35 号、2015、79～92 頁
http://ir.lib.shimane-u.ac.jp/metadata/31592

③野本瑠美、「中世百首和歌の研究」（博士学位論文）、東京大学大学院人文社会系研究科に提出、2014、163 頁

④野本瑠美、「『鴨長明集』の贈答歌―寿永百首との比較から―」、『島大国文』、査読無し、34 号、2013、1～13 頁

〔学会発表〕（計　４件）
①野本瑠美、『夫木和歌抄』と平安私家集、基幹研究「日本古典文学における〈中央〉と〈地方〉」研究会、2014 年 12 月 22 日、国文学研究資料館（東京都・立川市）

②野本瑠美、崇徳院と長歌、東京大学中世文学研究会第 328 回例会、2014 年 5 月 23 日、東京大学（東京都・文京区）

③野本瑠美、始発期の奉納和歌、山陰〈知〉の集積ネットワーク第 22 回研究会、2013 年 3 月 3 日、米子市立図書館（鳥取県・米子市）

④野本瑠美、『久安百首』における訴嘆の方法、和歌文学会 5 月例会、2012 年 5 月 21 日、お茶の水女子大学（東京都・文京区）

〔図書〕（計　１件）
①頼政集輪読会（中村文、他 11 名、8 野本瑠美）、『頼政集新注』中巻、青簡社、2014

〔その他〕
ホームページ等
特になし

６．研究組織

(1)研究代表者

野本　瑠美（NOMOTO Rumi）
島根大学・法文学部・准教授
研究者番号：４０６０９１８７